第八章

文化変容

文化変容と言うのは、継続的にお互いが接触する中で人々の文化のなかに生ずる変化として意義付けられている。二つの集団が細部において差異をもっているときに、似たような文化と言うものは、他の場合に比べるとずっと受け入れられやすいものである。こうした状況が、インディアン達と白人達、特に後者がしばしば授与者側のやり割を果たしていたが、との間の相対的な情勢であった。こうして、白人たちの衣服、日用雑貨、小道具類、銃、そして、馬などが吸収されていった。とはいえ、こうした仮定がいつも一方的だっけと言うわけではない。たとえば、トウモロコシはヨーロッパの文化へのインディアンからの贈り物であった；そして、ミズーリ川の上流で栽培されていた沢山の固有の植物が、この地域に入植した西洋人への天からの恵みになったことは確かであった。

当然のことながら、省力化のための様々な道具を受け入れたことが、儀式的なかで執利行われるような古いしきたりを残そうと、彼らが意図的に保存しようとしたもの以外のものづくりのための、古来の手作業や工程というものを大幅に合理化していった。こうした認識の中で見ると、そこには、文化的に得たものと同様に失ったものも少なくない。底には、たとえそれが利益をもたらすものであったにしても、決して、あらゆる可能性のある物質的なものの流れと言うものが、そのまま受け入れられたというものではなかった。平原に住んでいた部族は、絶滅寸前のバッファローの群れの変わりになる最も手短なものとして牛を受け入れたが、しかし、それは、ミルクを作ったり、乳を絞ったり、或いは、チーズを作るためのものでは全くなかった。さらに、白人達の文化の多くの要素と言うものは、何がしかの理由により、それが必要であったにもかかわらず、ずっと後になって導入された；たとえば、クロー族は1874年になるまでワゴンを手に入れることはなかった。

こうした、インディアンの白人達との純然たる接触を通して発生した変容と、アメリカ合衆国政府の意図的な計画による変容とをはっきりと区別する必要がある。広い範囲にわたる結果としては、貿易商たちがただその目的のためにだけやってきたことや、後の鉄道建設などによってもたらされたものなどがある。ゴースト・ダンスの流行していた時代に異なる部族によるこうした考えの急激な交換は、もっとずっと原始的な輸送の手段を取っていたこの平原地域においては、以前として可能なことではなかったのであろう。

合衆国政府の一般的な政策は、原住民達を読み書きのできるようにしようという考えのもとで、英語を話し、そして、白人達の仲間のようなキリスト教的な農民に、彼らの市民化を推進していくというものであった。この目的が、とんでもない恐ろしい問題を引き起こした。最初の段階において、常に、或いは、数世代にわたり放浪狩猟生活を営んでいた沢山の部族が、定住生活をするをよしとしなかったのだ。しかし、半定住の平原の

インディアン達ですら、白人達の農民の例を見習おうという気持ちがなかった。たとえば、こんなことがある。彼らが使っていた道具というのは、飼いならされた家畜を使って耕すというようなものとは全く異なる農耕技術であり、鋤や穴掘り器などであった。問題のあったのは、たとえば、それまでは、女達が栽培をしていたのが、新しい生活形態では、男がその仕事をするようになるのではという、社会的な変容であった。それから、まず、新しい農耕をする男達は誰もが顔色が失せ、そして、馬鹿にされるようになったのである。すべてのものがそうであったかと言うこととは離れて、原住民達に割り当てられていた広大な土地は、農業をするには不適切であり、或いは、灌漑を必要としたのだった。出先の事務所のやるべき仕事というのは、インディアン達に、農業と言うものは、だから、骨の折れる仕事であるということをお教え込むことであった。インディアン達のあるものは彼らの土地を白人達に貸すものが現れた。また、あるものは、牛が彼らにどんな目的であるかにはお構いなしに、これを殺し、そして、食料にして食べてしまった。何度も言うが、母系社会の部族においては、土地を親父から息子に相続させるように強制したときに混乱が生じたのだ。

産業における市民化を推進しようするときにおこる変化の一つの理解は、個人主義への変換であった。平原に住んでいたインディアン達は、自分の威信と言うものについては、極度に個性的であったが、しかし、経済的な面においては、彼らはしばしばこれとも対照的であった。誰とでも食べものは共有していたし、他の所持品にしても、少なくとも、血縁関係にある者達とは、同じように分かち合っていた。潜在的に成功した農民は、彼が部族の倫理間に忠実である限りにおいて、沢山の金のない貧乏人達により彼の経済的な基盤が築かれていったのであろう。この点において、個人主義というのは非常に広い意味において変化して行き、沢山の人が、非常に長い間、古くから伝わる習慣を馬鹿にするというのではなく、むしろ、物質的な財産を控えようとしていた。

一方、教育と言う面に目を向けてみると、合衆国政府は、保護居留区の内外で、学校教育というものを推進してきた。長い間、ペンシルバニアのカーライルにおける寄宿学校のようなものが、子供達は親と離れ、部族のしきたりから解放されて英語を学び、そして、アメリカ人的な生活に適合してゆくかなければならないので、とても有効であった。が、別の見方からすると、結果はそれほど成果のあるものではなかった；自分達の仲間から遠ざけられ、部族に戻った若い男や女は、少なくとも、ある期間の間は、彼の部落の者達からはよそ者としてみられたのだ。こうした、“教育を受けたインディアン”は、しかしながら、通訳として重要な役割を担うことができたし、また、合衆国政府の役所と折衝するなかで彼らの代弁者として活躍することができたのだ。

男たちにとって重要な人格的問題は、古くからつたわる人生の目的に代わる適当なものを見つけ出すことであった。バッファローが居なくなり、そして、戦いのための道具は過去のものになったために、彼らは、どんなものであれ、生きてゆく生涯の価値を作り出してくれるようなもの、それを見つけることがとても難しいことであるということに気が

ついた。沢山の者達が、厄介さはあっても古いものを好んだが、しかし、名誉を得る機会があると、彼らは、つまらない農民としての成功、或いは、機械化というものを選択するようになったのだと、その心情を強く言っていた。

教育と言うものが、様々な宗派の宣教師達によりもたらされたかなりの広範囲にわたるものであった。彼らの宗教的な指導の成果を評価することは難しい。それは、インディアン達がどれだけそうした努力と接触していたかによっているし、また、原住民と宣教師、両方の個人的な人格にもよっているからである。年寄り達について言えば、原住民の異教徒信仰と言うのは長い間、遅滞として進まなかった問題である。しかしながら、原住民的な宗教は、明らかに、宣教師的なものでも、また、独善的なものでもなかったから、インディアンは、キリスト教的な教義と古くから伝わる靈感の中に現れてくる精霊の現実の中での信仰とを結びつけることができた。パイヨーテ・崇拜のような、こうした最近の仕切りで改宗させようとする熱狂的な崇拜論のなかで、キリスト教もまた、原住民の考え方と容易に混和していった。

平原に住んでいた沢山の集団に取って、状況は異なっていたので、かれらの変容というものを、それらのすべて事柄を公正に評価し、一般的に論述することはできない。そうした事柄は、ある特定の部族が彼らの居留保護地区に移住させられたときに、彼らが自分達の歴史的な領域に残ったのかどうか、彼らはが合衆国政府の出先機関と激しい敵対関係のもとに武装衝突したのかどうか、教会か学校が設立されたかどうかなどの、こうした要素によっていた。最近の半世紀の間に、白人達のやり方への融和は確かに進展した。オマハ族を例にとれば、1910年に、彼らの40歳以下の人たちの90%が英語の知識を持ち、その中の大半の人は、上手に話をすることもできた。夏の間だけはテントを使うこともあったが、みんなが家に住むようになった。1270人の人口の中で、わずか20人の人たちの例外を除いて、すべての男達は市民服を着るようになり、一方、女性の年寄り達は、昔からの民族衣装と白人達の服の折衷のようなものを纏い、そして、若い者達のなかには、白人達のものと同じものを着るようなものも現れた。人々の95パーセントの人たちが四輪馬車や乳母車を使っていた。子供達の90パーセントは、一年間のしかるべき時間は学校で過ごした。二人のオマハ族の法律家、二人の商人、三人、ないし、4人の不動産業者、もしくは、カブ取引業者、数人の合衆国政府の事務所、そして、沢山の人たちが、農民として、彼ら自身の素晴らしい家を建てていた。

このように、オマハ族はインディアン問題取り扱い事務局が最初に設定した目標を殆ど達成していたが、しかし、そこには、平原インディアン達の最近の歴史の中における流れと、そして、それとは反対の逆の流れがあった。1933年から1945年までの間、John Collier 宣教師が事務局の長に治まり、原住民の持っている習慣が現代的な市民化に必要なものと衝突しない限り、彼らのその習慣を育成するという方針を採った。こうして、サンダンスが現在のような形で復活することができた。

これまで述べてきたようなことから説明される発展とは離れて、遠く離れたヨー

ロッパの西部地域やアメリカの田舎の人々の中に存在するような、“多神教徒”の復活もあった。1931年にクロー族の1人の老人が、自分の靈感の中でタブーとされてきた卵でできたものではないということがはっきりするまで、彼は、決してケーキを食べようとしなかった。その当時、ある中年の男は、自分の持っている菓子の包みが、月経の間の女達のそばで汚されることのないよう、大事に保管していた。アラパホ族は、わずか十年前まで、義理の母はタブーの対象であるということを固く守っていた。そして、多分、今もその考えが残っている。もっと一般的なことは、発展と保守、前者は、現代社会にできるだけ早く適合していこうというものであり、後者は、彼らが古代から伝わるもので使うことのできるものは、できるだけ大事にしようと言うものであるが、こうした考え方の間に、偏在するあがきのようなものが存在していたということである。

第九章

結論

幾つかの一般的な事実が、こうしたデータを認識することから浮かび上がってくる。ここで取り扱われてきた部族と言うものは、白人達との接触の時代の期間の明確な生活の様式を代表しているものとして、正当にみる事ができるものである。バッファローにたいする依存、毛皮に覆われたティピーの中での生活、狩猟や移動のための馬の活用、装飾や絵文字芸術の風変わりな形態、手話、戦闘に関するイデオロギー、サンダンス、そして、超自然信仰のややはっきりしないなど、こうしたものはわれわれが論じているこの領域に広く広がっている顕著な姿なのであり、どこでも同じように結び付けられるものではない。

しかしながら、文化圏と言うものは、人々を分別するただ単なる便宜的ものに過ぎず、であるから、われわれは、異なった整理の仕方が可能であり、そして、それが妥当なものであると認識しなければならない。半定住型の部族は、明らかにわれわれが議論しているこの地域では脇役の集団である；そして、彼らは間違いなくウィスコンシンやイリノイのウッドランドに住んでいた部族とウィスコンシン—南部平原領域というものを形成するために一緒にまとめられることができた。この見方と言うものが、特別な後押しにより南部スー族にも当てはまる。オマハ族、オトー族、そして、アイオア族は、ウィネバゴ族、メノミニ族、ソーク族、そして、フォックス族と、高原の平原に住んでいるインディアン達には、見ることでできない沢山の伝統を共有して持っている。たとえば、一つの例をとると、ラクロスのゲームと言うのは、合衆国の東半分の地域では非常によく普及しているものであるが、この遊びはわれわれの論じている領域にはそれを思わせるものは存在していない — 例外的に、アイオア族、オトー族、東部のダコタ族、そして、彼らからの分派であるアシニボア族のなかに見られる。文化の持つ別の殻から違った姿を見てみると、南部のスー族は、中央アルゴキン語族や、ウィネバゴ族と同じような父方の血縁社会の組織を形成していた。そして、その組織を元に親類と言うものを同じような形で体系付けていた (page 94)。社会的な生活の極めて重要な局面では、オマハ族は、彼らの仲間でもあるスー族たちよりもウッドランド地域に住んでいたアルゴキン語族のメノミニ族にずっと近いものがあつた。それは、われわれが、その流れをバッファローの狩猟というもの、後になり、馬というものに結び付けて着目するか、それとも、南部のスー族が西部に向かい移住をする中で、ウッドランドから持ち込んだ複雑な社会に着目するかという、その選択にかかわる問題である。

こうした見解のより広い観点から、われわれは、なにはともあれまず、平原のインディアン達の特色は、相当古代にまで遡る、そして、汎アメリカ的なものであったということ、たとえば、石を削る技術、家畜動物としての犬、火起こしドリルなど、であるということ認識しなければならない。リオ・グランデの北では滅多に見られないような、それほど広い範囲にわたり見出されたものではない要素が存在している；プエブロ族にだけにはなかったが、靈感の洞察というのが良い例である。他の特徴といえば、その中には、西や南西部から入ってきた人たちのことが含まれている。このような流れのもとで、臆で裏打ちした弓、堅いつま先のモカシン、そして、沢山の装飾紋様など消失している。しかしながら、この影響は、アメリカ大陸の東部に居住していた部族と共有されていたものにより段々影が薄くなり、そして、クリー族の雪靴のように、交流のあった間に見世物のような形で、西の地域に持ちこまれた。平原の文化は、あたかも、ウッドランド地域の文化の特化したもののようにも思われるが、しかし、それは、どこからでも入ってきた様々なものにより変化させられたものであり、そして、新しい環境への地域的な適合により変わっていったものである。

馬の導入というものが、活動範囲に多大の衝撃を与え、それまで、遠隔であった部族同士の間、相当離れた交流というものが実現した。その結果、膨大な範囲にわたる文化と言うものの均一化が起こった。このことは、外見的な出来事として最も注目すべき出来事ではあるが、しかし、それにより彼らが決して制限を受けたというものではない。コマンチ族、彼らは、平原の典型的な部族というよりもその周辺部族であるが、彼らは、大盆地周辺の部族との友好と言う伝統を持ち続けた。しかし、なかにはかなり時間がかかったものもあるけれども、彼らが、平原に住む最も典型的な人達とともに、どれだけ沢山の事柄を共有するようになったかと言うことには、実に目を見張るものがある。彼らの神秘的な数字というものは、大盆地に住んでいた沢山のショジョネ族まで、五ではなく四であった。彼らの灵感の洞察と守り神の精霊に対する態度は、まさしくクロー族のやり方を思いださせるものがある。ほんのわずかに工夫された形跡があるけれども、武闘集団は存在していたし、平原で行われた闘争と関係した一連の感傷的な行事や実際の戦いが行われていた。そこには、武勇というものにたいする美化が、そして、男は戦士として若くして死ぬべきであるという格言とか、手柄の朗唱、大量のバッファローの捕獲の誓い、襲撃の指導者に夜すべての筋道の理論的な裏づけの説明、死を誘う男達による“反対の”役割をする時折の見せ掛けといったようなものがあった。

ある部族が彼らの以前のしきたりを離れ、そして、と同時に、馬を取り入れ、ますますもって、バッファローの追い求めるようになったときには、また別の意味での一様化と言うことが起こった。こうして、平原に進出してきたクロー族のヒシたちは、カヌーを捨て、馬上の放浪民族となった；以前はトウモロコシを栽培していたシャイアンザ苦は、農業を捨て、バッファローの狩猟に専念するような定住民族となった；ポウニー族は、自分達の土地からそれほど遠くに移動はしなかったが、あまり農業に固執せず、ずっと熱心な狩猟

民族となっていた。

白人との接触としての重要性は、結果としての西部への移住と、馬を導入すること、このことは、改革の原動力となる力は誇張すべきではないが、それらのなかにあった。そうした結果というのは、単なる“Coronadoにより記述されている生活様式の必然的な変化”に過ぎないように思われる。(Eggan) 完全に变化した平原の文化としてどんなものが最初に馬を受け入れた部族の間で発生したものでなかったというのは、とても興味のある事実である；最も完全である言う意味では、アバッチ族も、ショショネーコマンチ族も、また、ネツ・ペレス族にしても彼らは、平原の部族と言うわけではなかった。簡潔な説明としては、沢山の平原の文化についての基本的な形と言うものが、馬の繁殖などと言うものには依存しない“東部のトウモロコシを栽培している地域”の中に以前から存在していて、それが、ウッドランドの人々か、或いは、その考えにより、その文化が大平原地帯に入ってくるようになったということである。このことは、これまでの記述してきたことから明確になっている。

最初の段階で、バッファローは東部の人たちに知られていないものと言うわけではなかった。そして、多分、後の時代よりも、前史時代にはもっとずっと大事な狩猟用の動物であった。バッファローの毛皮は、南東部では衣類として使われていたし、盾はバッファローの生皮からできていた。そして、角は、頭の房の飾りとして、スプーンや皿に付けられる材料と同じように加工されていた。ヒダツサ族の間では、鍬は、バッファローの肩の骨から作られていた。髪の毛は、編んで紐や、ベルトやガーターにされていた。これらは、オトー族や、カンザ族、そして、オサゲ族などの間に見られたバッファローの毛で作られた袋を思い起こさせるものがある。(Skinner) 動物達は、植民地時代には、南東部ではあまり見られなかったが、彼らは、今のケンタッキー州や、アーカンソーの北東地域では非常に沢山、生息していた。テネシー州、とりわけメキシコ湾岸の西部地域にも沢山見られた。クリーク族には、昔はバッファローの血族集団さえいた。

さらに北の地域には、様々なものの分布において地域的な違いがあるようだ。メノミニ族は、バッファローの毛を編み、踊りのときには、バッファローの毛皮でできた帽子をかぶっていたが、Catlinの時代(1832)には、彼らは、動物達を追って遠くまで出かけていかなければならなかった。ウィネバゴ族は、バッファローのあとを追いかけて、平原まで行ったし、彼らのある集団は、その一用品の名前が付けられていた；オジブワ族は、群れをおりの中に追い込んでいた。マイアミ族の場合には、バッファローは、とても大事な動物で、彼らは、毛皮をつかって毛布にしていた；こうしたインディヤンたちは、枯れ草を燃やして、それで、バッファローの群れを追い込み、猟師の待ち伏せしているところに誘導していた。注意が引かれたのは(page 16)、早期の西洋人との接触時代にこうした方法がどれだけ有効なものであったかどうかということであった。

さらに興味のあることは、漁業とか、猟、そして、農耕の相対的な重要性というのは、東の部族からそのほかの部族に行くに従い、大きく変化をしてはいるが、イリノイ族やマ

イアミ族の経済的な形態というのは、確かに、半定住生活をしていた平原のインディアン達のそれ、そのものなのであることだった。およそ、A.D. 1700年頃に、イリノイ族は、冬になり大きな狩猟の必要性に迫られ、自分達の居住地を後にし、そして、5月にかけて、トウモロコシや、大豆、そして、かぼちゃなどを栽培するためにまたもとの場所に戻ってきていた；ちょうど、マンダン族や、ヒダツサ族、そして、オマハ族で、女達が農耕をし、男は狩をしていたように。

食料を確保するための狩猟とか、放浪の旅をしている間の治安の管理(page 114)の機能以外に平原の部族のこれといった特徴は見当たらない。と言うわけで、われわれの一番初めの集団(1680)に関する報告は、サンテ・ダコタ族、多分彼らはウッドランドに住んでいた集団なのであろう、のものであるというようなことが起こる。Louis Hennepin、彼は、*A New Discovery of a Vast Country in America (London, 1698)*と言う本を書いたが、彼は、その部族から来た人たちの集団に会い、報復が突然あって、その時に彼らの食肉を差し出された：

15人か16人くらいの野蛮人がその場所の真ん中に入ってきた。彼らは、それぞれ手に大きな棍棒を持っていたのだ。彼らが最初にしたのは、彼らがわれわれを招待したこうした小屋をがっちり固定することであった。それから、彼らは、自分達の食料と、彼らが膀胱やそのほかのところから見つけた熊の油、これで彼らは、頭の上から足の先まで塗りたくっていたのだが、これらを全部持って行ってしまった。

われわれは、最初、彼らは野蛮人ではないと知っていたが、しかし、彼らはわれわれが、*St. Anthony* の滝の上に残してきた者達の何人かであるように見えた。彼らのうちの1人、彼は、自分のことを私の叔父と言っていたが、かれが、私に、われわれに食料をくれたのは、もともとやるべきことをしたのであり、そして、追いたてて他のものは森の中へ追っ払ったと話していた；そして、彼らの村の法律と習慣に従い、彼らのせいで、村のもの達が捕まえる前に、村にとって深刻な打撃となった牛が全部逃げってしまったので、彼らのものをすべて取り上げてしまうのは法にかなっているのだ；彼らは、見つけるといつでも、大量の牛を殺してしまうのだ；彼らをどの方角からも取り囲んでいるので、彼らにとって、逃げることはできないさ。

この事件のすべての特徴的な要素、いわゆる戦士の殺害、は、幾つかの旅や、経済的な主な発展時期に注目したときなど、いずれのときにも、他の西部ウッドランドにおいても起きていた。米の栽培をしていたメノミニ族や、ウィネバゴ族では、治安を統治する役所が、ある決められた日まではその畑に無断で入ることを禁止していた。ソーク族やフォックス族の戦闘をする時の酋長は、部族のものが狩猟から1人で村に戻ってくることを禁止していた。そして、掟に背いたようなもののカヌーや資産を破壊していた。これは、A.D.1700年頃のイリノイ族の話である。

警護に当たっている若もの達の集団が、直ぐに後を追い、本人を連れ戻し、そして、彼の腕をへし折り、身につけているものを引き裂いてしまうということで、このことが、彼らが陸で行動を起こし、狩をするときに部族のものが集団から離れないようにしていたのであろう。こうした野蛮人たちは、自分たちを出し抜いたものが、沢山の獲物を捕獲する前に動物達を逃してしまい、彼らは、ますます遠くまで獲物を求めて探しまわらなければならなくなるので、この種の掟を作っていたのだ。

別の言葉で言うなら、この典型的な“平原の”社会集団は、平原地域の東部で、古い旅行者達により観察されていたし、彼らは、白人達との接触による直接的、或いは、間接的な影響には全く無関係なものとして発見されていた。

超自然信仰について目を向けると、デラウェア族やそのほかの大西洋岸の部族 — このことは、それ以西の部族について述べていることではないが — 子供達を、思春期か、或いはそれ以前に、できるだけ早く靈感の世界に送っていた。これは、ちょうど、ヒダツサ族やオマハ族がやっていたことと同じようなものである。ヒューロン族の場合には、発汗小屋のことが、そして、そのあと直ぐに川に飛び込むというようなことが、インディアン達の習慣についての *Lafitau* の研究の中で報告されている。(1724) ヒューロン族の呪術師は、1620年と言う早い時期に、自分の腕を煮えたぎるお湯の中につけたり、燃えている石炭を素手で掴むというようなポウニー族のトリックをやっていた；そして、同じような魔術が、そのあと50年も経ってから、ニューヨークインディアンからも報告されていた。

ある種の儀式の組織の中で見られた馬の鬣を切ったものは、ポウニー族やオサゲ族、そして、アイオア族などの男達の間で通常使われていた典型的な頭飾りであった。サーク族やフックス族たちも全く同じようなものを持っていた。そして、それが1665年に *Manhattan Island* の *David Pieterz De Vries* の注目を引いた：“彼らの頭の天辺はまるで、鳥のとさかのようだ”と。最後に、平原のインディアン達の武闘について述べると、これは、プエブロ族、大盆地、そして、高原地域に住んでいた部族の姿勢とはっきり違っており、それは、むしろ、馬が導入される前後のミシシッピー川の東岸にすんでいた部族の精神に非常に似通っていた。この指摘は、時によっては、馬とかそのほかの経済的に価値のあるものを熱望することが、好戦的な企てをすることが、その根拠と言う観点からするとまさしくばかげたことだと思わせるために必要だったということを提示していた。かなり古い殖民時代の観察者である *Virginia* の *Powhatan* が、稀に、彼らは、“女達や子供達のためではなく、土地とか神のために、そして、それは、原則的には、復讐という形で”闘ったとはっきりと述べていた。後になり、馬を盗むということが、自然と、南東部の部族の間では重要な目的となったが、しかし、彼らがそれを手に入れるということよりも優先的に、報復とか社会的な出世というものが、戦争の遠征する動機となっていた。そこに、頭皮を剥がすことに過度の重要性を感じていた平原の部族との決定的な相違点がある。(page

106) 事実、われわれが考察をしている地域では、指導者は、もし彼が、自分達の仲間を死なせたり、宗教的な信頼が大きく薄れてきたり、さらには、侵入者達に、戦争のための魔法の包みに相当するものを持ち去られたりするような場合には、その立場を失っていた。

同じような観察がさらに北の地域についても明らかにしていた。1632年に、ある観察者が、ヒューロン族は、彼らが、“世界中のすべての金よりももっと価値のあるものと考えていた名誉とか賞賛がすべてであり、それ以外の報酬の約束とか希望など無し”に戦いに出かけていったことを明らかにしていた。大手柄(**page 108**)と非常によく似たようなある種のもので、幾つかの東部の部族の間には存在していた：ヒューロン族とかイリノイ族は、敵の捕虜を、ただ、彼に障るだけというような扱い方をしていた。イリノイ族の指揮者は、襲撃で殺された自分の部下の家族を癒さなければならなかった；マイアミ族の指導者は、成功したときにはすべての榮譽を手にしてはいたが、一方で、失敗したときには、その不名誉を一身にうけていた。われわれの斥候を送り出し、そして、彼らに、公式の報告をさせるという仕組みは、別の面での同じような考えに基づくものであった。自然と、一つの形として同じような形態を真似たものが平原の部族の間にももたらされた。このようにして、1774年のデラウェア族の間から始まった、戦争のための包みの考え方が、メノミニ族や、サーク族、フォックス族、そして、ウィネバゴ族たちの間で最盛期の花を咲かせた。その終わりごろには、敵兵に障るということが、彼を殺すということよりも価値のあることとされ、彼らは、若い者達に、年を取って死ぬのではなく、若いときに敵と戦い死ぬことのほうがよいというのが、平原のインディアン達にとっては普遍の最大の誉れだと教えていた。

手短に言えば、必ずしもすべての平原のインディアン達にとって必要なことではなかったが、ヨーロッパの影響がでる以前に、平原の地域の文化には、とても生き生きとした内容があったということである。さらに、この平原の地域には、1541年に Coronado は、地域的な重要な付随的文化 — 村人のものと、放浪の民のものとが存在していたということを明らかにしている。キビラ族の人たちは、トウモロコシを栽培し、そして、“わらぶきの”の家を建てていた。そして、“沢山の人たちが一緒に住んでいた[一つの定住地]”があり、その周りにはそのほか人々の密集した地域がいくつかあった。”こうしたこととは対照的に、ケレチョ族やテヤ族は、“瀬戸物のようなものは全く持って折らず、・・・守りの柵も作らず、トウモロコシの種もまかず、そして、パンも食べてはいなかった・・・。” 彼らは、生計の手段をバッファローの肉に、そして、燃料にはバッファローの糞に依存していた。“テヤ族は、マスケット銃で撃つくらい、矢で両方の肩を通すほど正確に牛を仕留めていたと見られていた。” 人々は、“牝牛のなめし皮で作られたテント”に住み、移動するときには、そのテントを犬の背中に乗せていた。ペミカンや、二本棒の運搬棒、仕草による会話などが、とりわけスペイン人の入植者達により立証されている。しかしながら、後にウッドランドに住むインディアンや白人達が平原に沢山のものを持ち込み、それが確認され以前に、この文化圏の生態学的な様式が形成されていた。

最も早い時期にここを訪れた白人により描かれた原住民の姿のように不完全であり、われわれは、平原に住んでいた放浪の民が、大盆地に住んでいた原住民達の生活の悲惨な条件のもとで生活していたという印象は持っていない。Colorado の男達は、200 くらいのティピーのあるところ入ってきており、このことは、そこは、いうなれば 1000 人程度の集団ではなかったかと思われる。後になり、ただし、それは馬が彼らの元に来る前であるが、多分、1740 年代に、Piegan は、ショショネ族の 350 人からなる戦士達に対抗して、推定人口として、1500 人程度が集合することができた。最後に、少なくとも南部放浪民族は、彼ら自身、毛皮をトゥモロコシやそのほかのものと交換したりして、プエブロ族との取引により、豊かな生活を確保する位置にあった；この相互の行き来が、さらに沢山の文化の付加的取り込みを積極的に推進させた。

いつの時代にもわれわれがはっきりと把握できる平原地域に住んでいたインディアン達は、大盆地や、南西部の部族と区別できるほど、ウッドランドの人々からはっきりと切り離して考えることができないということが事実として残っている。にもかかわらず、バッファローの有効的な生態学的利用というものが、ある種の特有なものを創造したのであり、そして、この基盤の上に文化的な複雑さというものが、馬や毛皮の取引、或いは、そのほかの白人達のもたらした影響と言うものがもたらされる前に、はっきりと根付いていたのである。この事実の上こそ、原住民文化の領域について話す強い理由があるのである。

さらに詳しい文献

特別の平原に住む部族に関する多少の詳しい記述をした、専門的な難しさのない沢山の本があります。

Bowers, Alfred W., *Mandan Social and Ceremonial Organization*, University of Chicago Press, Chicago, 1950

Curtis, Edward S., *The North American Indian*, Vol.4 [Crow], The University Press, Cambridge, Mass., 1909.

Fletcher, Alice C., and Francis La Flesche, "The Omaha Tribe," 27th Annual Report, Bureau of American Ethnology, Washington, D.C., 1911.

Grinnell, George Bird, *The Cheyenne Indians*, Yale University Press, New Haven, 1923.

Lowie, Robert H., *The Crow Indians*, Farrar & Rinehart, Inc., New York, 1935.

McClintock, Walter, *The Old North Trail* [Blackfoot], MacMilan & Co., London, 1910.

Wallace, Ernest, and E. Adamson Hoebel, *The Comanches: Lords of the Southern Plains*, University of Oklahoma Press, Norman, Oklahoma, 1952.

この地域に関する考古学的な研究に関する本はありませんが、しかし、つぎに掲げる随筆が現代の考察や結果についてのかなり具体的な姿を示してくれます。

Chapman, Carl H., Culture Sequence in the Lower Missouri Valley, in *Archeology of Eastern United States*, pp.139-151, James B. Griffin, ed., The university of Chicago Press, Chicago, 1952

Eggan, Fred R., The Ethnological Cultures and Their Archeological Back grounds, in *Archeology of Eastern United States*, pp.35-45, James B. Griffin, ed., The University of Chicago Press, Chicago, 1952.

Mulloy, William, The Northern Plains, in *Archeology of Eastern United States* pp. 124-138, James B Griffin, ed., The University of Chicago Press, Chicago, 1952.

Strong, William Duncan, From History to Prehistory in the Northern Great Plains, in *Essays in Historical Anthropology of North America*, Smithsonian Miscellaneous Publications, Vol. 100, pp 291-352, Washington, D.C., 1940.

Wedel, Waldo R. Culture Sequences in the Central Great Plains, in *Essays in Historical Anthropology of North America*, Smithsonian Miscellaneous Publications, Vol. 100, pp 292-352, Washington, D.C., 1940.

この地域についての沢山の一般的な本の中で、わずかではあるがとても興味があり、そして、ためになるものが記述されているものとして：

Grinnell, George Bird, *Blackfoot Lodge Tales*, Charles Scribner's Sons, New York, 1904.

Lindermann, Frank B., *American: The Life Story of a Great Indian* [Crow], The John Day Company, New York, 1930.

Lindermann, Frank B., *Red Mother* [Crow], The John Day Company, New York, 1932.

Mariott, Alice, *The Ten Grandmothers; a Contribution to the Ethnology of the Kiowa Indians*, University of Oklahoma Press, Norman, Oklahoma, 1945.

Schultz, J.W., *My Life as an Indian* [Blackfoot], Doubleday, Page & Co., New York, 1907.

Schultz, J. W., and Jessie L. Donaldson, *The Sun God's Children* [Blackfoot], Houghton Mifflin Company, Boston, 1930.

とても素晴らしい早期の研究者達が、白人たちの影響により全く変わってしまう前の平原に住んでいたインディアン達の見事にはっきりとした姿を示してくれています。下に掲げた著者達の何人かにより沢山の注目すべき点が報告されています。

Catlin(1796—1872) は、合衆国の中の沢山の部族を訪問したアメリカ人画家でした。そして、とりわけ、1832年に彼が訪れたマンダン族についてはとても優れた観察をしています。Wied Neuwied の Maximilian 王子(1782—1867) は、よく洗練されたドイツ人自然学者ですが、彼は、1832年にブラジルを訪問したことで、彼自身非常に明確な考え方を持っていたのですが、彼は、ミズーリ川上流地域に住んでいたインディアン達の下に、2年間にわたる冒険旅行を実施しました。彼は、マンダン族については、Catlin から簡単ではあるが、いろいろなことを教わり、この部族が天然痘によって大幅に人口が少なくなる前の、二・三年の間の文化について素晴らしい記述を残していました。そして、さらに、そのほかの沢山の部族のことについても、やや簡潔な観察の記録をしていました。Carl Bodmer、彼は、スイス人画家で、この王子のお供をしていましたが、事実の表現したとても貴重な絵を沢山描いていました。Henry と Thompson は、19世紀に入るまで、ブラックフット族の国で毛皮の取引をしていたとても知的なイギリスの商人でした。Denig は、1843年に、イエローストーン川の合流点近くにある Fort Union 砦にあった American Fur Company の簿記係として働いていました。そして、この領域ではとても素晴らしい活躍をしていたのです。アシニボア族の酋長の娘と結婚し、この妻の部族、並びに、その周辺部族についての研究ができる特殊な立場を多に活用していました。Lewis と Clark の有名な冒険

(1804—1806) は、Thomas Jefferson 大統領により企画されたものでした。St. Louis から出発し、彼らは、ミズーリ川とジェファーソン川を遡り、そして、ロッキー山脈を越えて、コロンビア川をくだり、ついに太平洋まで到達したのです。彼らは、出会った実に沢山のインディアンの部族についての記録を残しました。彼らの日誌の原本に加え、彼らの科学的な観察結果をまとめた沢山の研究が報告されています。

Bradbury, John, *Travels in the Interior of America, in the Years 1809, 1810 and 1811*, Smith & Galway, Liverpool, 1817.

Carlin, George, *Illustrations of the Manners, Customs and Conditions of the North American Indians*, Henry G. Bohn, London, 1848.

Denig, Edwin Thompson, “Indian Tribes of the Upper Missouri.”, 46th Annual Report, Bureau of American Ethnology, Washington, D.C., 1930, pp 375-628.

Henry, Alexander, and David Thompson, *New Light on the Early History of the Great Northwest*, edited by Elliott Goues, Francis P. Harper, New York, 1897.

Kurz, Rudolph Friedrich, *Journal; an Account of His Experiences among Fur Tradwers and American Indians on the Mississippi and the Upper Missouri Rivers during the Years 1846 to 1852*, Bureau of American Ethnology, Bulletin 115, Washington, D.C., 1937.

Lewis, M., and W. Clark, *Original Journals of the Lewis and Clark Expedition* (Thwaites edition), Dodd Mead & Co., New York, 1904.

Maximilian, Prince of Wied, *Travels in the Interior of North America*, translated by H. Evans Lloyd, London, 1843.

Winship, George Parker, ed., *The Journal of Coronado, 1540-1542, from the City of Mexico to the Grand Canyon of the Colorado AND THE Buffalo Plains of Texas, Kansas, and Nebraska, as told by himself and his followers*, A.S. Barnes & Co., New York, 1904.

平原インディアン達の文化について、或いは、その特別な面についての学術論文は Bulletin XVIII や American Museum of Natural History ; Annual Reports and Bulletins of the Bureau of American Ethnology ; そして、Anthropological Series of the Field Museum of Natural History, Chicago などに所蔵されている人類学に関する論文の中に見ることができる。